

與槲之載在下品同、千金翼方、證類本草同、本草和名云、柏實和名比乃美、一云加倍乃美、則槲柏非同物明矣、皇國古書訓柏爲加之波、蓋其說不同也、源君混槲柏爲一條、非是、又按柏經典相承作柏、見五經文字、然上文引兼名苑、柏音百、訓加倍、果蓏部引本草柏實亦音百、訓加倍、此引唐韻作柏、音帛訓可之波、蓋源君誤以柏栢爲別字也、今俗承其誤、以爲二字不同、非是、古事記、日本紀、延喜式、大神宮儀式帳、其他諸書皆以柏訓加之波、

〔饅頭屋本節用集草加木〕柏

〔書言字考節用集六生植〕槲カシハ本草、爾雅所謂樸櫟也、

〔大葉櫟〕同上柏カシハ本朝俗用此、

〔古事記下應神〕天皇聞看豐明之日、於髮長比賣令握大御酒柏賜其太子オホミキカシハ○仁

〔古事記傳三十二〕加之波と云は、もと一樹の名には非ず、何樹にまれ、飲食に用る葉を云り、故書紀仁德卷に、葉字を書いて此云箇始婆ナニガシハとあり、然るに又某賀志波と名負たる樹も、古より彼此とあるは、あるが中に常によく用ひたるどもを、然は名けたるなり、古書どもに、加志波に柏字をあらむ、和名抄には槲字を出して、和名加之波とあり、此は何の木を云るにかはあらむ、おぼつかなし、若は今世にもはら加志波と云ふ事あるそれにや、凡て上代には飲食の具に、多く葉を用ひしことにて、後にも万葉ニに、家有者、筍爾盛飯乎、草飯を炊くにも、飯に葉を敷もし、覆ひもして、炊きつるから、炊葉の意にて加志波とは云るなり、比羅傳ヒラダと云器も、書紀に葉盤と書れたる如く、葉以て造れる物なり、又膳夫カシハデと云も、飲食の葉を執あつかふからの名なり、伊勢物語に海松を高壇に盛て、柏をおほひて出しけるとある類も、古のさまの遺れるなり、

### 〔松屋叢考〕三樹考

柏カシハは炊葉にて、上古は甑に葉を敷て飯を蒸たるより然いひ、食物を盛もし、食物の上にもおほひ、下にも敷たるなど、みな柏といへり、延喜四時祭式上に、槲カシハ一俵、まタ柏九十把、齋宮式に千槲三俵、弓絃葉一荷、大膳式下に青槲ハナカシハ、荷葉、大和、河内、攝津等國所進、干